

# 幼児と小さな自然との触れ合いの エピソード研究

金子龍太郎、今川亜里砂  
高 ひろ子、中村 忍  
宮本 慶子、宮本 裕子

## 〔問題と目的〕

幼稚園教育の基本は、幼児期の特性を踏まえた「環境を通して行う教育」である。ここで環境とは、子どもを取り巻くすべてのものであり、周囲の人間や、家・幼稚園などの生活環境、そして自然環境も含まれる。こうした環境の中で成長していく子どもたちが自然界の動植物と直接触れ合う経験を通して、生き物に対する思いやりの心を育てるのが環境による教育の一目標といえる。直接体験による認識とは、単に知識を獲得させるためではなく、自然への驚きと興味・関心、自然の美しさ、自然への思いやりなどの感性を育てるためのものである。つまり、幼児にとって、植物や動物との触れ合いを通して知識を獲得することで終わるのではなく、そこから「生きている物」たちへの限りない愛情を育てることが求められる（山内、1990）。

ここで、自然との直接体験に関する教育者の思想を見てみよう。まず、ルソー（1762）は著書「エミール」の中で次のような文章を残している。

「クモの巣ひとつ見られない清潔な家で育てられた子どもは、クモをこわがり、大人になってからもまだ恐れているようなことがよくある。わたしは、男でも女でも子どもでも、クモをこわがるような農村の人にであったことはない。

いったい、なぜ教育を、子どもが話したり、聞いたりするまえからはじめないのだろう。なにを見せるかということによってさえ、子どもは臆病になったり、勇敢になったりするのだ。わたしは、子どもを新しいもの、みにくい動物、いやらしい動物、奇怪な動物を見ることになれさせたい。だが、これは、はやくから、すこしずつやることで、そうすれば、やがて子どもはそういうものになれ、ほかの人がそれをいじるのを見ているうちに、しまいには自分でもいじってみようになる。子どものころにガマやヘビやザリガニを見ても驚かなければ、大きくなってからはどんな動物を見ても恐怖を感じることはあるまい。どんなに恐ろしいものだろうと、それを毎日のように見ている者には恐ろしくなくなる」（「エミール・上」、p. 73）

ルソーは、自然との直接的な触れ合いによって、子どもたちが生き物の外見だけから嫌悪感や恐怖感を抱かないような教育のあり方を訴えていたのである。

次に、世界で最初に幼稚園（Kindergarten）を創設したフレーベルは、人間形成の基礎を養成する場として幼稚園を考えており、そこで求められたのは、自然の美しさ、不思議さに感動し、親や教師の愛情による知性と感性の教育であった。彼の教育理念は、幼児を豊かな美しい花園のなか

金子 龍太郎・今川亜里砂・高 ひろ子・中村 忍・宮本 慶子・宮本 裕子

で、愛情深い教師のいる環境で教育することによって、幼児に自然と人間への深い信頼と愛情を育てることであった（フレーベル、1862）。彼はこう語っている。

「人間および子どもが自然を心からよく知り、自然と心から融合することが、自己の天職に向かったの子ども達の発達にとって、人間の教育にとって、諸民族および人類の陶冶にとって、はなはだ重要であるということは、この著作においてすでにいろいろな面から強調してきたところである。じっさい、自然をよく知り、それと融合することは、一面からみると、個々人ならびに全人類の実りの多いかつ祝福にみちた教育および陶冶の確固たる基礎なのである。なぜならば、われわれが自然を神の直接の行為の啓示として、もしくは神の最初の啓示として考察する時以上に、われわれは自然の全本質をより確実に、自然のあらゆる関係をより十分に、またより生き生きととらえることはできないからである。しかしわれわれは、この重要性をいまだ個々にわたって展開していないのである。この重要性はしかし、自然の生成と発展のなかに示され、とくに自然の生成と発展を人間の成長発達と比較して観察する場合に、したがってまず第一に自分自身の成長発達と比較して観察する場合に示されるのである。

ところでこの比較的な観察は、人間自体および人間一般にとって重要であるが、それはまだもっぱら成長し自己発展しつつある人間、すなわち子どもや青年にとってとりわけ重要である。こうして十分で全面的な教育、したがって幼稚園の本質は、必然的に、そのための機会が子どもにあたえられることを要求する」（「幼稚園教育学：フレーベル全集第4巻」、p. 544）。

そしてフレーベルは、幼児一人一人の花壇を用意し、植物を育てる直接体験を通しての教育を実践したのである。彼は、自然の中で万物が神の恵みの元に生き生きと生命力を発揮しているように、幼稚園の中で幼児が生き生きとその本質を育んでいけるようにしたのである。

今日の日本のキリスト教保育にもこれらの理念は受け継がれている。たとえば、南（1997）は彼女の保育観の中で、子どもと自然との触れ合いを次のように表している。

「子どもほど素朴な心で自然を愛すものはほかにないと思います。そしてまた、自然ほど子どもの心を魅了する力を持っているのはこの世に少ないのではないのでしょうか。

子どもは、花や鳥、虫をこよなく愛し、空の月や星に想像の翼を広げ、何の変化もないように見える土、砂、石、水、光の中にも無限の神秘を発見します。大地を踏んで大空の下に遊ぶ子どもは生き生きとしています。私ども大人は子どもを自然から遠ざけないようにすることがたいせつであります。

現代は、人が作ったものや世界に目を奪われ、自然が与える恵みと教えの意味を見失っているように思えてなりません。子どもたちは自然の中で多くのことを学び、成長してゆきます。美しいものに感動する心、神秘的なものへの驚き、計り知れない宇宙の法則への関心などです。それに、科学や芸術、宗教への芽がはぐくまれ、人間としての基本的な感性や知性が豊かに培われることを忘れてはなりません。

心して、子どもが自然と触れ合えるように、また、自然を見つめる目を豊かに、広く、また深くするために心づかいをすることがたいせつであります」（「輝くひとみをいつまでも」、pp. 36-37）

## 幼児と小さな自然との触れ合いのエピソード研究

幼児と小動物との直接的な関わりに関する記録は、多くの幼稚園・保育所で蓄積されている。たとえば、幼稚園の生活場面からは、つい十日くらい前まで草むらから毛虫を採ってきて、石でつぶして遊んでいた子どもたちも、毛虫を殺していたことが嘘のようにせつせと餌を運んで育てるようになったという保育実践がある。子どもたちは、毛虫を殺す興味を仲間とのかかわりのなかで、毛虫を育てる興味に変えていった（安部、1980）。また、保育所の2歳児クラスで、カタツムリを踏みつけてつぶしてしまったことなどの失敗をとおして、自然との出会いが豊かになった経過の報告もある（宍戸、他、1990）。

このように、自然の中で幼児たちは動く虫を追いかけ、捕まえ、好奇心を満足させようとする。こうした体験を通して生命というものを知り、生き物とつきあう方法を身につけるのであり、幼児にとっては不可欠な原体験だ。しかしながら、それらは子どもが成長する過程での通過点であり、ひととおり体験したら、成長段階にあわせ、むやみに採ったり触ったりするのではなく、自然の中で暮らす生き物のありのままの姿を見ることのおもしろさや自然愛護の精神を学ばせなければならない。また、動物飼育の際には、身近にたくさんいる普通の生き物を選び、飼育には子どもに責任を持たせることが大切となる。自然の中から採ってきて自分のものにする、という所有欲を満たすだけで終わらせては自然を大切にすることは育たない（日本自然保護協会、1994）。

以上の点を踏まえて、本研究の目的は、幼稚園教育要領の基本理念である「環境を通して行う教育」を考察するに当たって、幼児たちのごく身近にある自然を取り上げ、大人が嫌悪感を抱いたり、見過ごしてしまう小さな生物との関わりの中で、子どもたちがいかに豊かな学びをしており、そこから保育者や親が教えられるという事実を示すことにある。記録対象の小動物との関わりに関しては、幼児が小動物に残酷な行為をしたり、殺したりする場面も含めて記録していく。その理由は、そうした幼児の行為は小動物に対する好奇心や興味から生じたものであり、むやみに禁止することは、幼児の好奇心や探索欲を抑え、自然に対する関心を奪ってしまう可能性があるからである。そして、そうした幼児の行為を目にした保育者がどう関わるべきかを考察していく。

また、本学の教育理念である「主を畏れることは知恵の初め」との関連では、主が創られたあらゆる生き物に対する畏敬の念を、幼児が動植物と直接関わる中で育んでいけるように、いかに保育者が方向づければよいのかについても論じていく。

### 【方 法】

幼児たちと身近な小さな自然との関わりを、日常の保育場面の中で、園内に生息する小動物の自然観察や飼育中のエピソード記録として整理し、まとめる。

- 1) 自然観察の例：幼児たちが、園内に身近にいる小動物（ミミズ・ダンゴムシ・ワラジムシ・アリ・バッタ・カタツムリ・蝶や蛾の幼虫・カマキリ・カエル）を見つけ、触り、捕まえる様子を観察する。
- 2) 飼育の例：上記の小動物を子どもたちが飼育できるように、飼育箱等を用意し、その様子を記

金子 龍太郎・今川亜里砂・高 ひろ子・中村 忍・宮本 慶子・宮本 裕子

録する。

エピソードの採集期間は1998年5月から11月までであり、子どもの言動を共同研究者である保育者が記録すると同時に、写真による記録も残した。

### 〔結果と考察〕

#### 1) エピソード記録

(エピソード1：小動物を可愛がろうとするが、扱いが下手な3歳児女児A)

5/27 女の子たちが部屋のテラス横でダンゴムシを観察している。

女児A「ダンゴムシって、くちないのお？ あ、る、よ！」

教師「なに食べるの？」

女児A「ケーキとか。ちょっぴつとね」ダンゴムシ落とす。「バイバイ、ダンゴムシ」

教師「逃がしたの？」

女児A「ダンゴムシって、はないのかな？ あらーっ。ダンゴムシくるくるなっちゃった」

歯を見ようとしたら、ダンゴムシがまるまった。それから小さなダンゴムシを見つける。

女児A「わあ、かわいい。ちっさいダンゴムシ。これあかちゃん」

その後、女児Aはダンゴムシを集めはじめる。20匹くらい、イチゴパックに入れ、うれしそうに家に持って帰った。

(翌日の朝)

教師「Aちゃん、おはよう！ ねえ、昨日のダンゴムシどうしてる？」

女児A「あのね。おうちにかえったら、ママがこれぜんぶしんでるよって」母は虫が嫌いで、すぐに捨てられたと思われる。

6/1 女児A「ほらっ。ちょうちょ（モンシロチョウ）つかまえた！」

教師「わあっ。どうやってつかまえたの？」

女児A「パチーンって！ うふふっ。」

他の子「いーなあ。いいなあ。チョウチョほしい。おうちもってかえりたい」女児Aはしばらく手に持っている。たくさんの子が集まってきて見ている。

教師「ちょうちょさん、どうしたの？」

女児A「はっぱのうえにそーっとやすませてあげたの。そしたらね、おやすみしてた。パタパターって、うごいたよ」

6/3 女児Aがアリを手のひらに2匹持っている。

女児A「ほら、ふたつー！」（見せたときは、1匹つぶしてしまっていて動かない）

女児A「ひとつ……。ねてる……。わあー、かわいい。ねてるよ」

7/7 女児Aがカエル6匹手の中に入れてる。

女児A「ほら、いっぱいー！ わあ、にげちゃう、みてみてー！」

しばらくして、テラスでしゃがみ、手の中のカエルを出してしょんぼり見つめている。そのうち

の5匹は死んでいる。

教師「カエルさん、どうしたのかなあ」

女兒A「なんか、めあいてるよ」

とてもしょんぼりしている。ひっくりかえったカエルをずっと見つめている。

女兒B「おいけにいれてあげたら？」

女兒Aはだまってお池にカエルをつれていく。

(エピソード2：小動物にとっても関心があるが、怖さや悪戯心から残酷な行為をする3歳児男児A)

5/30 お片づけ後、皆イスに座っているが、男児Aが一人玄関前の廊下に置いてあるオタマジャクシの水槽を見ている。

男児A「ねえ、せんせい。さわっていい？」

教師「いいよ」指でオタマジャクシをチョンチョンとつつくと、1匹ずつ沈んでいく。

男児A「みんな『ぼくをだーいすき』って、ゆうとる？」(ニコニコして)

教師「ウン！言ってるみたい」男児Aは満足して部屋に戻る。

6/4 ハサミムシを見つけ、嬉しそうにニコニコでつかまえるが、すぐにはさまれる。

男児A「いたーい！」手を振って落とす。「このやろ！このやろ！」足で踏みつぶす。

木にくっついているナメクジを見つける。

男児A「つかまえていい？」

教師「いいよ」

男児Aがつかまえて手に乗せて見ていると、溶けるように小さくなっていく。

男児A「ワアッ！このやろ！このやろ！」手をこすり合わせてつぶしてしまう。

6/24 女兒B「おさかな、いないかなー」庭の中から、男児Aと木の枝を探してくる。木の枝を池に入れて魚釣り。サギが池に飛んでくる。

男児A・女兒B「うわあー」サギはその声で上の木に飛んで止まる。男児Aと女兒Bは下からそーっとのぞく。

女兒B「あっ、こっちみてる」

男児A「うわあ。こっちみたあー！」(二人は逃げていく)

6/26 カエル2匹、ずーっと握って歩いている。カエルはぐったり。

教師「カエル、おうちにかえしてあげようか？」

男児A「どこ？カエルのおうち、すなのなか？」ちょうど、他の子がタライの中に少し水を張り、カエルを集めているのを見つける。



写真1 にぎりしめて死なせてしまったカエルを前にしょんぼりしている(手の近くの黒いものが小さなカエル)

金子 龍太郎・今川亜里砂・高 ひろ子・中村 忍・宮本 慶子・宮本 裕子

男児A「あ！ここや、ここにいれよう！」 タライに入れるが、その2匹だけぐったりしている。

石を拾ってきて、上からねらい落とし、カエルに当てようとする。

みんな「だめー！Aちゃん、かわいそうやよ！」

男児Aはどこかに行く。

**(エピソード3：残酷な行為をしていた子どもに変化が見られた例：3歳児男児B)**

5/1 男児Bがアリに砂をかける。「アリさん、かわいい！」と言う。しかし、教師がアリを手に乗せて近づけると砂をアリにかける。こわいのだろう。

5/20 男児Bがアリを見つけて足で踏む。他の子どもが「おいしゃさんにつれていったらなおしてくれるよ」という。

教師「おいしゃさん、どこにいるのかな？」と言うと、クラスの他の子どもが「ここだよ」とアリの巣を教えてくれた。

5/27 男児Bが帰宅のとき、母親の顔を見ると安心し、玄関の片端(いつも場所が決まっている)にいる大きなアリに「ヤー、トゥー」とポーズを取り、戦っている様子。足で踏みつけている。母親が「かわいそうじゃないの」と言っても知らん顔している。

7/13 男児B「せんせい、ダンゴムシみつけたー」とシャベルにダンゴムシを乗せて、見せてくれた。(久しぶりにダンゴムシやアリに興味を示した)

7/14 男児Bは戸外に出るとダンゴムシ探しを始めた。

男児B「せんせい、いたよー」とうれしそうに見せに来た。

男児B「アリしゃん、いるよー」前のように踏みつけたり、戦ったりしていなかった。



写真2 ダンゴムシをつぶさないようにつかまえる

このように、3歳児段階では、小動物への怖さや不慣れのために、残酷な行為をしたり、不適切な扱いが多いのだが、関わりを増す毎に、適切な対応を修得していく。しかしながら、そういう体験がないと、いつまでも小動物との関わりは深まらない。一例として、小動物に触れる経験がない4歳児のエピソードを紹介しよう。

**(エピソード4：小動物と関わってこなかった4歳児)**

虫とほとんど関わったことのない女の子たちにダンゴムシを見せたときの反応である。教師の手の上の丸まったダンゴムシを見て、「わあ、かわいい」という。そして、自分の手にも乗せる。しかし、ムクムク動き、元の姿に戻った瞬間、パッとダンゴムシをはらったり、「うわあ」と驚く。

動くことに驚いたり、たくさんの足が気持ち悪いという子どもがいる。

幼稚園の子どもたちは、日頃から小動物と関わる中で成長していく。5歳になって好奇心や興味が旺盛になると共に、小動物に対する知識が増していき、生き物としての理解が深まり、適切な関わりが見られるようになる。

(エピソード5：小動物に対する興味から残酷な扱いをする一方で、優しさを示す5歳児)

6/1 戸外の水場に2cmくらいの黒い虫を発見する。

男児Aがホースで水をかけはじめ。男児Bがじょうろと容器を見つけて持ってくる。男児A「むしのおふろだ！」じょうろの中に虫を入れ、水の流れて容器にだそうとする。

男児C「かわいそうだよ」

男児B「なんで、かわいそうなの？」

男児Dが加わる「おふろに入れるー」

男児C「はやくださないとしんじやうよ」 他の者が  
水に気を取られている間に男児Cがそっと庭に逃がす。

男児D「むし、どこやったんだよー」

6/2 男児Cと男児Dがコガネムシをマットの上に置き「トランポリンだ」とマットをたたいて、虫をはずませて遊ぶ。はずめばはずむほど面白そう。

「これ、ハチミツだよ」途中、休ませるかのようにハチミツをしみこませた綿の上に置く。



写真3 水のなかに虫を入れて遊んでいる

また、試行錯誤しながらも、クラスの仲間との関わりの中から、科学的知識に基づいて小動物への関心が深まっていくのもこの時期である。

(エピソード6：知恵を出し合って学んでいく5歳児)

7/4 女児A「せんせい。トンボがいるよー。きてー。」と教師を呼びにくる。

教師「どこに？」と見に行く。クラスの子どもたちが集まってきて、トンボを追いかけ回したり、見たりしている。

男児E「だめだよ。おいかけたらにげていくよ。じっととまってないと」

皆、腕を伸ばして、じっと立っている。トンボは近くの低いところをぐるぐると飛んでいるが、止まる気配はない。



写真4 飛んでいるトンボを指先にとまらせようとしている

金子 龍太郎・今川亜里砂・高 ひろ子・中村 忍・宮本 慶子・宮本 裕子

子どもたち「ぐるぐるってまわしたらとまるよ」

女兒B「みみかして」 教師が顔を近づけると耳元で

女兒B「あのね。トンボの好きなものをおいといたらくるかもしれないよ」

教師「トンボの好きなものってなあに」

男児E「はっばだよ」

女兒B「アリをつぶしておいておけば？」

教師「トンボって何を食べるの？」

子どもたち「わかんない」

男児F「うちのほんにでてるかもしれない。しらべてみるよ」

#### (エピソード7：小動物の正しい知識を身につけて、適切な行為を行える5歳児)

10/7 昨日、一昨日のカマキリのことが一段落したところに、3歳児と5歳児の兄弟が飼育箱を持って登園してくる。中を見ると、カマキリとトンボ、草や枝がたくさん入っていた。保育室にもっていくと、子どもたちが集まってきたが、5歳の男児Gは、トンボと一緒に入っていることをとても気にしている。

男児G「このままだと、トンボがたべられてしまうよ」

教師「でも、もしこのトンボを逃がすとカマキリはどうなると思う？」

男児G「あ、そっか」

どうしようか、二人でしばらく悩む。結局、持ってきた5歳児の許可をとって男児Gが外に逃がす。トンボの羽が一つ食べられているが、何とか木につかまって動いていた。

集合して、皆にカマキリを紹介して見せて、カマキリが何を食べ、どこで暮らすのがよいかと話し合う。やはり、自然のなかで生きている虫を食べるので、「くさやきのあるやまがいい」、ということになり、持ってきた子どもが元のところに逃がすことになる。

しかしながら、こうした虫たちとの関わりは、母親にとっては受け入れがたい面があり、往々にして、子どもと自然との触れ合いを妨害してしまうことも多い。

#### (エピソード8：クリを捨ててしまった母親)

10/1 3歳児が園外保育でクリ拾い。

男児C「あ、ハリのおうちだ！」「ねえねえ、これがクリなの」「このなかって、なにがはいっているの？どうなっているの？ ぼく、みたことない」

とても喜び6個拾う。大事にカバンに入れて、チャックを開けて何度ものぞいて嬉しそう。さようならをして、玄関を出て母のところへ行って、嬉しそうにカバンのなかを見せたとたん、母はあわてて幼稚園の門の所でぜんぶ捨てる。男児はびっくりして黙って立っている。

教師「どうしたんですか？」



母親「クリって、虫が出てくるから気持ち悪くって」

教師「子どもさん、中に何が入っているか、楽しみだったんですよ」

母親「ああ、そうだったの。ごめんねー、夢を壊して。でも、汚くって」

次回から、この子どもは栗を拾うことはなくなった。

こうした母親の影響を受けて、子どもたちは自然と離れていくのだが、その関係を修復するのも保育者の役目となる。

(エピソード9：母親の影響を受けて虫を避ける子どもたちに働きかける保育者)

11/6 3歳児が園外保育でたくさんドングリを拾ってきた。それを洗って干してあったのを箱に入れてみると、数人の子どもが手伝ってくれる。新聞紙の上にドングリ虫（ゾウムシの幼虫）が動いていた。一瞬、皆ハツとなり、箱にドングリを入れるのをやめる。母親が虫を嫌がっていたことを思い出したためだろう。

教師「わあ、虫さんだ。おはよう」

子どもたち「・・・」見つめているだけ、ちょっと嫌そうな表情。

教師「あのね、この虫さん、ドングリのおうちの中に住んでたんだって」

子どもたち「えー、どこどこ？」

教師（ドングリの穴を見せて）「ほら、ここの穴からヨイショって出てきたんだよ」

子どもたち「どうやって？」

教師「カリカリって、穴をあけたのかねえ、面白いねえ」

女兒C「わあー、かわいい！」 手でつまむ。大事そうに見る。みんなものぞく。

女兒C「おにいさん、おねえさんにもみせてこよーっと」 スキップで出かけ、ずーっと、それはそれは大事に持っている。ニコニコしてはずんだ足どりで散歩していた。

教師「お名前、つけてあげたら」

女兒C「うん！ えーっと、かわいいから、カオルちゃんにしよーっと」（カオルちゃんは自分の妹の名前）

その後、おやつするときもお弁当のときも、プリンカップにカオルちゃんを入れて、自分から離さない。

母親からの手紙「いつも、ありがとうございます。昨日、娘が持ち帰りました幼虫に名前『カオルちゃん』がつきまして、娘が家で飼うと言ってニコニコしています。ところで、この虫、いったいなにを食べて（やっぱり、ドングリですか？）、いったい大人になったらどんな風になるのでしょうか。ご存じでしたら教えて下さい」

現代の、自然との関わりの少ない中で生活する母親も、幼稚園で小動物と関わる子どもの姿から

金子 龍太郎・今川亜里砂・高 ひろ子・中村 忍・宮本 慶子・宮本 裕子

見方を変えていく。

(エピソード10：小動物に触れる経験をさせてこなかった母親が子どもの変化から学ぶ姿)

6/17 5歳児男児の母親からの連絡帳

「生き物（とくに虫など）に対して、怖いものから自然の中の生き物としての仲間だ、という意識や気持ちが現れて喜んでいきます。昨日、店の駐車場の横にあるドブに小さなカエルがいることを知り、ペットにしたいと話していました。今日、帰ってきて、虫かごを持ち長靴をはき、着々と準備を整えて、『ゲットだあ』と、真剣な顔つきで、はじめはこわごわ手を伸ばし、やっておりました。1匹つかまえたら満足げに『僕にもできたあ』、といわんばかりの顔つきでした。あんなに、『こわーい』と逃げていた子が、『成長するもんだあ』、と感激しました。『息子は虫が嫌いなんだよね』とレッテルを貼り、決めつけていた私がいけなかったな—とつくづく思います。

5匹捕まえてから、『ともだちに、えさはなにをやっていいのかきく』といい、電話までするしまつでした。答えは生きた虫などで、『バッタは、ぼくつかまえられんし—』

友達のお母さんが『カエルを飼うのは難しい。一、二日で逃がしてあげるのよ。生きた虫などの餌はあげられないし、死んじゃうとかわいそうだしね』と息子に話してくれました。理解したらしく、夕方になって4匹は逃がしてあげていましたが、1匹はやっぱり園のみんなに見せたい気持ちがあるみたいです。『自分にもできるんだ』という自信がついたみたいです」

幼い子どもたちは、未熟さや好奇心から大人の思いもよらない行為をすることがある。自然との関わりの中だけでは、特にそういう事が多い。そうした幼児の言動を受け入れられれば、子どもは学びながらも、子どもらしさを発揮し続けられるだろう。

(エピソード11：幼児のとんでもない行為を受け入れる親)

6/1 3歳児男児が幼稚園の庭でウンチをしてしまった。ウンチにたかってきたハエを踏みつけようとして、靴がウンチだらけになった。そして、ウンチに触った指を口の中に入れていたようだ。遠くにいた教師が気づいてやってきて、ウンチの後始末をして、事の次第を子どもから聞く。帰る時にそのことを母親に連絡した。

翌日、母親から男児がウンチ事件のことを父親にお風呂で話していたことを聞く。ハエが食べていたから自分もウンチを食べてみたそうである。父親は「ウンチの味を知っているのはお前だけだ！」と言っていたとのこと。（次からはトイレでウンチをしている）

2) エピソードから学ぶこと、その1：生きものを嫌がる、怖がることについて

子どもの前での親や保育者の言動や立ち振る舞いが子どもに及ぼす影響力の大きいことを大人は自覚する必要がある。たとえば、へびを忌み嫌い、ハチを過剰に恐れる大人の言動は見事に子どもがまねする。だが、「へびちゃん、きれいなおめめね、前から見ると可愛いでしょう！」とか「ハ

チはじっとしていれば決して刺したりしないのよ」といった冷静な反応をしたら、ヘビを怖がる子にはならないし、ハチを恐れずに、しかもその危険性に対しては、冷静に対応できる子どもに育つことだろう（日本自然保護協会、1994）。

本研究の記録対象となった小動物は、ダンゴムシ、ミミズ、カエルなどであり、母親や女性の保育者にとっては、嫌悪感を抱かせる気持ち悪い対象である。そうした小動物に対して、まるで友だちのように、宝物のように扱う幼児の姿を見ていると、大人が生き物の外見によって対応を変えていたことが良く分かる。つまり、大人たちが気持ち悪い生き物を嫌い、可愛い生き物を好んでいる事実が改めて明らかとなる。それに対して、神が創られた生き物をすべて受け入れているのが幼子であり、大人はむしろ幼子から学び直さねばならないのではないだろうか。

可愛く美しく役に立つ動植物を受容し、醜く気持ち悪く役に立たない生物を遠ざける大人の価値観が、そのまま子どもの世界にも取り入れられていくのではないかと危惧さえ抱く。外見的に可愛くない、勉強ができない、障害があるなどの理由で、ある種の人たちを排除している日本社会の現状と無関係ではないように思える。そうした中であって、すべての生命体を隔てなく愛することを考える上で、米井（1927）がスイスの教育学者ペスタロッチの教育理念を世の中に訴えた一文を紹介しよう。

#### ペスタロッチにかへれ

世にあはれなる 醜い児 愚かな児 家の貧しい児

ペスタロッチは これら不幸なる児童達のすべてを愛しに愛した

その廣い愛、深い愛、涯しなき愛

愛はすべての人の心の糧である

われら、ともすれば

美しい児を近づけ 賢しらな児を褒め 家富める児のみ懐けんとする

はづかしくはないか かへれペスタロッチに

### 3) エピソードから学ぶこと、その2：殺したり、残酷な行為をする子どもに対して

子どもの発達段階に応じた自然体験を概観すると（日本自然保護協会、1994）、

- 1) 0-3歳では、虫を捕まえる、草花を摘む、棒や石ころを使う、虫に刺される、ネコにひっかかる、イヌに吠えつかれる、カニやバッタに逃げられる体験を通して、自分の思い通りにならない世界があることを認識する。
- 2) 4-6歳になると、友達と共同で自然物を採って遊ぶ、自然物を道具として用いる、自然物を食べる、飼育していた生物の死を見て「死」を認識する。

ようするに、幼い段階では、まず何よりも小動物が好きで、触れたり採ったりするのが楽しくて仕方がない、という感性を育てることが大切である。その過程で、たとえばアリの踏みつぶす、ミミズをたち切る、タンポポの花を摘むなどの行為も、ごく幼い年代であるならば、大切な基礎体験

金子 龍太郎・今川亜里砂・高 ひろ子・中村 忍・宮本 慶子・宮本 裕子

として容認されていていい。いくつかの小さな殺りく体験を通して、惻隱の情や生命への倫理が、実感を伴って豊かに培われるものである。実体験を欠落したままに観念的な自然保護を説いても、付け焼き刃に終わるだろう（日本自然保護協会、1994）。

しかしながら、保育者にとって、生き物に対して残酷な行為をしている子どもにどう対応したら良いかは、とても難しい問題である。3歳位の子どもに対しては、「かわいそう」「やめて」という保育者の思いを伝えるが、禁止はしないようにする場合もあろう。3歳児は小動物にとっても興味があって、可愛がりたいのだけど、うまく扱えなくて殺してしまうからである。時間がかかるかもしれないが、ある程度成長して、本人自身が納得できるまで待つ姿勢が求められる。

一般的に言って、残酷な行為そのものだけから判断せずに、子どもがどう捉えているかとか、その場の状況に応じて対応する。たとえば、虫を殺してしまった子どもがしょんぼりしているならば、「死」を認識している証拠なので、責めたりせずにそっとしておく。また、個人で残酷なことをしている時は、好奇心から生じた行為である場合が多いので、教師の気持ちを伝えるだけで禁止しない。しかし、集団で行っている場合には、他児に流されていることも考えられるので、止めさせる。こうした、子どもに応じた、その場に応じた臨機応変な対応も必要とされよう。そして、生物の死や痛みを子どもに伝えるのが保育者の役目である。さらに、日頃の礼拝のなかで、小さな虫や花にも生命があることを話すのも、キリスト教保育のなかで大切となる。

ここで、今残酷な行為や親としては容認できないことをしている幼児が、必ずしも将来残酷で冷血な大人になるのではないことを示す典型例を、現在キリスト教保育に携わっている一人の保育者の子ども時代のエピソードから紹介しよう。

(その1)自分の家の物置に洗って片づけられていた大きなポリ容器(食品を入れるためのもので、ふた付き)にアマガエルを44匹集めていて、50匹まであと少し!というところで母親に逃がされてしまいました(今、考えると母の気持ちはよーくわかります)

(その2)バッタなどの足を関節でとってしまいました。

(その3)アリは、体の一つの部分をつぶしても死なないと知り、つぶしました。

(その4)近所の男の子がセミの体にヒモをつけてくれたものを持って、セミの散歩をしました。

(その5)なぜか、スイカの種は育てたらカブトムシになりそうな気がして、綿を敷いて、飼っていたこともあります。

#### 4) おわりに

最後に、本研究に参加した、5人の幼稚園教諭の感想を記して、エピソード記録を集めていった意義を示すことにしよう。

##### (教師A)

今まで以上に、虫に対する様々な子どもの姿が見えました。たとえば、同じ年齢の子どもが同じ時期にミミズに対して、一方は「魚釣りのエサ」として、他方は「自分の大切なペット」として対

応しているのです。

私自身、幼い頃には触るどころか自分の服に虫がついただけでも「キャーキャー」さわいでいたのに、今ではすっかり虫とたわむれる日々を過ごしている、というのがなぜかとても不思議に思えます。

今回のエピソード研究を通して、今まで見えなかった子どもの姿、生きものに対する一人一人の対応の違いをとっても興味深く感じました。

#### (教師B)

豊かな自然がありながら、実体験の良さが生かされていませんでした。体験をする以前に、知識を与えてしまうことが今までは少なくなかったように思います。子どもの好奇心をそいでしまっていたのかもしれませんが。知識を先に与えてしまったことで、実際に触れる前からそのものを知ったような気持ちにさせてしまっていたかもしれません。十分に時間をとり、実際に満足いくまで触れた後に小動物の本を見ている子どもの目には、さらなる興味を感じる事ができました。

大人の考えや言葉を上から浴びせていたり、残酷と思われる行為を「小さい虫にも命がある。生きている」のような安易な言葉で止めようとしていました。大切な体験をしないまま、豊かにあったはずの興味、好奇心、気づきを奪ってしまっていたのでしょうか。幼児期のこういった行為の必要性を知りつつも、見守るだけということには迷いを感じます。教師の思いを伝えるのであれば、その時期やタイミングを十分に考えなくてはならないと思います。子ども自身の気づきを願うばかりです。

キリスト教保育に携わる者として思うことは、小動物に対する身近な大人のまなざしは子どもたちへ大きな影響を与えてしまうということです。そこでは、私たち人間は小動物と共に生きているということ、人間と同じように神によって大切に愛されて作られ、一つとして同じものはない、というまなざしを向けていきたいと思います。

#### (教師C)

研究の途中では、どこまで言ってもよいのか、だまって見守るのがよいのだろうか、止めた方がよいのではないだろうか、悩みや葛藤がたくさんありました。けれども、はじめにやめさせてしまうのでは、子どもの気づきや発見の芽を摘んでしまうことを学び、見守りの姿勢をとることにしました。

教師の一言は子どもたちに大きな影響があります。この一言を言わなかったらどうなるだろう、と私にも楽しみでした。クラスに虫博士がたくさんいることにも助けられて、子どもたちで話し合ったり、決断したり、知識を出し合ったり、「一言」を我慢することで、自分たちで考え合えることを知りました。

今までは、残酷なことや虫の死骸などは子どもの見ていないところで片づけてしまう、というのが私の考えでした。でも、この研究を通して、「これは違うかもしれない」と思い始めました。虫

金子 龍太郎・今川亜里砂・高 ひろ子・中村 忍・宮本 慶子・宮本 裕子

に対する残酷な行為も、不気味と思われる虫や死骸にも触れることも、体験を通して学ぶ様子がよくわかりました。

それから、「死」に対する考え方としては、やはりキリスト教主義の保育をしていることで救われていると思いました。そして、このことによって、虫や花などの小さな生き物に対して、残酷な扱いをしつづけたまま大人にならないよう願っています。

自分の幼児体験の貧しさを反省し、様々な面において、好奇心や探究心を失わせない保育者でありたいと思いました。

#### (教師D)

以前から、好奇心によって小動物に残酷な行為をする子どもについての話し合いをしてきて、小動物の命をとるか、子どもの探究心をとるか、答えのない保育の難しさを感じていました。私も、子どもが小動物の命を奪おうとする場にいたら、子どもたちを止めると思います。そうした場合、子どもたちの好奇心や命についての学びを奪うことになるのでしょうか。

子どもの今までの様子、家庭環境や心理状態などをふまえ、私たち保育者は、どう声をかければよいかと考えます。その点から考えても、ケースバイケースではないかと思いました。そして、何が正しいという数学の答えのような答えの出し方ができない保育の深さや責任の重さを思い、これからは自分自身がそのつど自問自答して子どもと関わっていかねばならないと痛感しました。

教師の共通理解として、「ここまでなら止めない」などと打ち出すのは難しいと思いますが、その子の場合はどうするか、など保育者同士の話し合いである程度は決められるかもしれません。しかし、それもはっきりと「これが正しい」とは言えないし、いろんな考えを持った多くの人と関わり、子ども自身が育っていくことが望ましいのではないかと思いました。

研究を終え、子どもたちと共に今までよりももっといねいに自然と向き合い、子どもたちと向き合って保育していけそうな気がします。体験から学ぶ子どもたちの姿を大切にするなど、研究から学んだことは自然との関わり以外のことにも共通して考えられることがあると思います。

#### (教師E)

この研究に参加させていただくことになり、子どもと小さな自然の触れ合いを追っていくうち、追えば追うほど、エピソードを記録し、それだけで伝えるのはとても難しいことだと思いました。その子の日常の言動、その子の今まで育ってきた環境、入園してからの今までの様子、家族の対応、などすべてが合わさり、幼い年齢であっても、生き物に対してのその子らしさがあり、感じ方や考え方の違いがあると思いました。しかし、エピソードに過剰な説明を加えるのも、主観的な見方になってしまうのではないかと迷いました。残酷な場面に出会った時にどう対応するか、についても、子どもの年齢、その時の状況、そしてその子の育ち、すべてによって異なることを痛感し、子どもに対しても、以前よりももっと慎重に言葉をかけるようになりました。

幼稚園の教師をしていて驚いたのは、ダンゴムシが丸まることを知らなかったり、ドングリの中

## 幼児と小さな自然との触れ合いのエピソード研究

から虫が出てくることを知らない母親に出会ったことです。そればかりか、今たくさん経験をして、いろいろな興味を示し、そして吸収していこうとしている幼い子どもたちに対し、平気で「汚い」「捨てなさい」「さわっちゃだめ」という言葉を言う親が多いことです。保育者であるから敏感になるのか、特に私は「大人の意見の大きさ」を強く感じました。

### (引用文献)

- 安倍富士男（編）1980「幼児に土と太陽を：畑づくりから造形活動へ」 あゆみ出版  
フレーベル、F. 1862 「幼稚園教育学：フレーベル全集第4巻」小原國芳・荘司雅子（監修）  
1981 玉川大学出版部  
南 信子 1997 「輝くひとみをいつまでも」 福音社  
日本自然保護協会 1994 「小さな自然かんさつ：こどもと楽しむ身近な自然」平凡社  
ルソー、J.J. 1762 「エミール・上」今野一雄（訳）1962 岩波出版  
宍戸健夫、他（編）1990 「みんなで育てみんなでつくる：飼育・栽培・料理」水曜社  
山内昭道 1990 「身近な環境とのかかわりに関する領域：環境」 東京書籍  
米井節次郎 1927 「ペスタロッチにかへれ」 教育時報、5、77-78.